

洛西等持院

水野恭一郎

万年山等持院は足利政權成立の初期、足利尊氏によって創建された臨濟宗天竜寺派の禅刹で、爾來足利將軍家歴代の菩提所とされた寺院である。北区等持院北町に在り、京福電鉄嵐山線の等持院駅から北へ徒歩約五分。古い由緒ある禅院らしい閑寂なたたずまいをもち、京都の諸寺院の中でも私の好きな寺院の一つである。この地は衣笠山南麓の松原と呼ばれた地域で、当寺の庭園の北にその借景として衣笠山の麗姿を望むことができる。

等持院の草創が南北朝初期、足利政權成立直後の頃であることは確かであるが、はっきりとした年次については十



等持院正面

分明らかでない。その上に、この衣笠山南麓の等持院のほかに、洛中にもほば近い時期に足利氏によって同名の等持院が建立されており（洛中の等持院はのちに等持寺と呼ばれるようになる）、この洛西と洛中の二つの等持院が混同して論じられることが従来少なくなかった。このことに關して一応まとまった考察をされたのは東大史料編纂所の今枝愛真教授で、『中世禅宗史の研究』（第三章第一節「足利直義の等持寺創設」）の中で洛西と洛中二つの等持院の區別を明らかにされるとともに、草創は洛西の等持院の方がやや早いとの説を示された。

洛中の等持院についてははっきりとした史料の初見は、『師守記』暦応二年十一月廿六日の条の「是日於武家三条坊門第等持院、有曼陀羅供」の記事である。武家三条坊門第というのは將軍尊氏の邸であつて、この記事からすれば、少なくとも暦応二年（一三三九）十一月の頃には將軍御所の敷地内に等持院ができていたことが知れる。開山の住持は古先印元で、印元が等持院住持になったのは前年の暦応元年らしいので（『禅居附録』）、洛中の等持院の創建は暦応元年中とみてよいようである。この等持院が建てられた將軍尊氏の御所の敷地は、三条坊門（御池通）北、高倉東二条南、万里小路（柳馬場通）西の区画で、柳馬場通二条下ルのあたりは、今も「等持寺町」と呼ばれている。

なお、この洛中等持院の寺域について、『後愚昧記』永

徳元年（一三八一）十二月二日の条に「件寺（等持寺）者當時禅院也、元來号淨華院、淨土宗寺也、向阿上人開山也」と記され、もと淨土宗の淨華院のあった地であるとしている。淨華院は、この時、ここから土御門室町に移され、その後、天正十三年（一五八五）秀吉の京都の町割り改造の時、現在の寺町通広小路上ルの地に移されたのである。

ところで、この洛中の等持院に対して、洛西松原の等持院は、前述のようにその草創の年次は明確でないが、恐らく建武三年（一三三六）足利尊氏が政權を樹立した直後の頃、生母上杉清子の隠居の寺院として営まれたのではないかと思われる。それは、康永元年（一三四二）十二月廿三日清子が逝去し、その三十五日忌の際の南禅寺笠仙梵僊の法語の中に、「等持院殿二品太夫人雪庭藤原氏」とあつて、清子に等持院殿雪庭禅尼の法号がおくられていることから推察できるようである。等持院殿の院号は、その後、尊氏逝去の際に、また尊氏にこの院号がおくられることとなり、この時、清子の院号は果證院殿と改められている。

洛西松原の等持院の敷地は、『山城名勝志』や『都名所図会』などには、もと仁和寺の一院のあったところとしている。地域的な関係からもその可能性はあるし、また貞治六年（一三六七）十二月二代將軍義詮死去のことを記した『愚管記』の記事（十二月十二日の条）に、「大樹（義詮）去八日夜、移^{仁和寺}等持院、今日茶毗、每事禅侶沙汰云々」と

あつて等持院のところに仁和寺と傍註していることなどからも、もと仁和寺の一子院のあつたところを、尊氏が譲りうけて禅院に改めたものであることは、ほぼ間違ないであろう。そして暦応元年に洛中の將軍御所の敷地内に等持院が、いわば幕府の官寺的な性格をもって造立されたのちも、洛西松原の等持院はそのまゝに存続され、洛中の等持院の別院として、足利家の私的な菩提所ともいふべき存在であつたと考えられる。

洛中の等持院はその後、康永元年尊氏の生母清子が亡くなつた頃から等持寺と呼ばれるようになり、幕府の行ふ公けの法会などは等持寺で営まれることが多かつた。そして等持寺はやがて三代將軍義満の時代に五十十刹の制が整えられてくるとともに、康暦二年（一三八〇）には十刹の第一位に列せられた。しかし、その前々年の永和四年三月に義満が北小路室町に造つた新御所に移り、（花御所、室町幕府の名の起り）、次いで至徳二年（一三八五）室町御所の東に隣接して壮大な禅刹相国寺が創建され、やがて五山第二位に列せられて、この相国寺が幕府の官寺的存在となるに及んで、等持寺の官寺的な役割は相対的に低下していった。なお洛中の等持院（等持寺）の創建には、尊氏の弟直義の意図がかなり強くはたらいいていたらしく、開山古先印元も直義の要請によつて迎えられたようであるが、その關係から、貞和五年（一三四九）尊氏・直義の間に不和が生

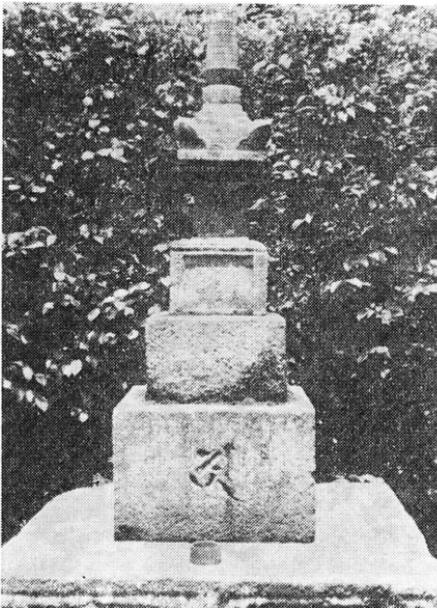
じ直義が失脚してのち、古先印元は翌觀応元年京都を去つて鎌倉へ下り、そのあと天竜寺開山夢窓疎石が改めて洛中等持寺の開山とされた。洛西の等持院の開山は、はじめから夢窓疎石であつたようである。等持院文書の中に、夢窓國師門徒中に宛てた尊氏の御内書（写）があり（十二月十三日付）、「等持院兩所事、依開山國師（疎石）辭讓、可爲天竜寺末寺之由、彼在世之時契諾畢、今更不可有相違、至末代、專門徒一味之興隆、致三品禪門（足利貞氏）二品禪尼（上杉清子）及先亡後滅之追福也、於住持職者、就本寺并國師門徒吹拳、任先例、可爲檀門之勸請之狀如件」と記されている。この文書は夢窓國師の寂した觀応二年（九月三十日寂）か、その翌年頃のものとして推定されるが、等持寺・等持院の兩所ともに天竜寺の末寺として興隆につとめるべきこと、尊氏の両親貞氏・清子および足利家一族の追福を致すべきこと、兩寺の住持は夢窓國師の門流より擇ばるべきことが述べられている。

この文書からもうかがえるように、洛西松原の等持院は、洛中の等持院が等持寺と改称され十刹に列せられるようになってのちも、足利家の菩提所として重んぜられ、延文三年（一三五八）四月三十日に足利尊氏が逝去すると、この洛西の等持院に葬られた。ただし『太平記』（卷三十三）には「衣笠山ノ麓、等持院ニ葬奉ル」と記しているが、『愚管記』（延文三年五月二日の條）には、「今夜大樹（尊氏）

葬礼云々、於真如寺有此事、一向禅宗之沙汰云々」とあつて、葬礼は等持院の東に隣接する真如寺において営まれたとしている。真如寺は、尊氏の執事であつた高師直が、康永元年四月に、仏光禪師（無学祖元）の塔所正脈庵のあつた地を整えて中興し、仏光禪師の法孫にあたる天竜寺住持夢窓疎石を開山に請じた禅刹で、尊氏逝去の頃すでに十刹の一つに列せられていた。隣接する等持院も開山は同じ夢窓疎石であつた関係から、葬礼は真如寺で行われ、のち等持院に葬られたものと思われる。二代將軍の足利義詮が貞治六年（一三六七）十二月七日死去した時にも、前掲の『愚管記』の記事には、等持院で荼毗とあるが、『後愚昧記』（十二月十二日の条）には、「今日大樹（義詮）於真如寺、有荼毗之儀、毎事禅僧之沙汰云々」とあつて、一は等持院、一は真如寺と記している。恐らくこの頃、等持院と真如寺は寺域を接して、殆ど同じ寺内のような関係にあつたのではないかと察せられる。

足利尊氏の墓は、現在は等持院方丈の北裏の庭の一隅に建っている。宝篋印塔で、「延文三戊戌年四月廿九日、等持院殿太相国一品仁山大居士」の銘が刻まれている。尊氏に大相国すなわち太政大臣が贈官されたのは、百回忌にあたる康正三年（一四五七）四月のことであり、また、この百回忌の年にあつて、時の將軍足利義政が等持院を修造したとも伝えられているから、尊氏の宝篋印塔も、恐らく

その頃に造立されたものであろう。墓の位置も、もとは現在の所ではなく、池をへだてた庭園の北隅に、いま「足利歴代將軍遺髮塔」と呼ばれている十三重石塔の建っている場所の西のあたりにあつたと寺では伝えている。なお、同じく等持院に葬られた二代將軍義詮の墓所はどこなのか不明である。三代將軍義満の葬礼も、やはり等持院で営まれ（『教言卿記』応永十五年五月十日の条）、四代將軍義持の葬礼もまた同様であつた。『満濟准后日記』応永三十五年正月廿四日の条に、義持の葬礼のあと、等持院に安置すべき義持の御影（木像）のことについて述べられている記事があり、「御影木像事、於被安置等持院御影ハ、御俗



足利尊氏墓

体可_レ宜敷、又可_レ為_ニ御法体_一敷云々、時宜趣、当院等持院御影ハ尤可_レ為_ニ御俗体_一由可_レ宜様ニ被_レ仰云々、〔中略〕已等持寺殿(尊氏)・宝篋院殿(義詮)・鹿苑院殿(義満)三代御影俗体ニテ御座候キ」とあつて、將軍逝去の直後、その俗体の木像が等持院に安置されるのが恒例であつたことを伝えてゐる。また『蔭涼軒日録』の文明十八年(一四八六)

七月十五日の条には、この日、前將軍義政が等持院へ参詣した様子を記し、その記事の中で、当寺の昭堂には「本尊三所、中央地藏、左辺釈迦、右辺観音」が安置され、次の間には「御木像、上間等持院殿・鹿苑院殿・普広院殿(義教)、其外木牌三ヶ在之、下間宝篋院殿・勝定院殿(義持)・慶雲院殿(義勝)、木牌三ヶ在之」と述べて、やはり尊氏から義勝にいたる歴代將軍の木像が安置されていたさまを伝えている。これらのことから、等持院が足利將軍家の菩提所として、室町幕府政權下においては極めて重んぜられた寺院であつたことを、よくうかがい知ることができる。なお、洛中の等持寺の方は、応仁の乱の戦火に焼失し、以後は廢寺同然となつて、文明年間頃には洛西の等持院に合併されていた。

現在の等持院の昭堂は「靈光殿」と呼ばれているが、本尊は地藏菩薩、向つて右に開山夢窓国師、左に達磨大師の像が安置され、次の間に、やはり尊氏以下足利歴代將軍の木像が安置されている。ただし等持院も、戦国期には足利



清 澁 亭

將軍の權威の凋落とともに次第に衰退し、一時は荒廢にゆだねられていたが、慶長十一年（一六〇六）に豊臣秀頼がこれを修造再興した。その後、江戸時代の文化五年（一八〇八）にまた火災に遭い、現在の堂舎は、方丈が文政元年（一八一八）に妙心寺の塔頭海福院の方丈を移建したものであるのをはじめ、殆どが江戸末期のものである。

方丈の北裏にある広い庭園は、開山夢窓国師の作庭と伝えられ、庭の中央の池は芙蓉池と呼ばれているが、池の形が心の字をかたどったように見えるところから、心字池の名もある。庭は回遊式になっていて、芙蓉池をめぐって自由に散策することができる。尊氏の墓もこの池の南側のほとりにある。また、庭の西北隅の小高い所には、清漣亭と名づけられた茶室がある。この茶室は、將軍義政が康正三年に当寺を修造した頃に造立されたものといわれ、庭に南面して、向って右手奥の一疊を上段構えの貴人席とした武家風の二疊台目の茶室である。水屋はその左手にあって、入口が土間になっているのも珍しい。なお水屋の左手にも四疊半の席があるが、これは明治以後に建てそえられたものである。清漣亭の東には自然石の手水鉢があって司馬温公形といわれており、また亭前の近くにある灯籠一基は等持院形灯籠と呼ばれている。更に清漣亭を東に下ったところに樹高一〇数メートルの有楽椿の巨木があり、樹齡三〇〇余年といわれ、京都にある有楽椿のうち最古最大の銘木で

ある。庭に東面する書院では抹茶の接待をうけることもでき、閑寂で美しい庭の風情を觀賞しながら、一服の茶に心の洗われる思いのひとときをもつことができる。

当寺にはまた豊臣秀吉の肖像画があり、図上に慶長四年八月十八日南禅寺雲臥庵の三章令彰（のち天童寺第一九五世住持）の賛がある。秀吉の逝去は慶長三年八月十八日であるから、秀吉の一周忌にあたって画かれたものである。

秀れた作品で、絵師は長谷川等伯ではないかといわれている。この秀吉の肖像が当寺にあるのは、秀頼が慶長十一年に当寺を修造した因縁によるものであろう。また、当寺所蔵の古文書には、前掲の足利尊氏のものをはじめ、足利歴代將軍の書状、そのほか戦国から織豊時代の武将の書状、当寺所領関係の文書など、およそ六〇点が伝存されている。等持院は一度は是非訪れて、その由緒ある歴史を偲ぶとともに、美しい寺のたたずまいを觀賞してほしい京都の名刹の一つである。

（みずのきょういちろう 文学部教授）

